

平成22年 6月 22日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2007～2009
 課題番号： 19530493
 研究課題名 (和文) 乳幼児の発達における児童福祉施設の役割と保育カリキュラムに関する研究
 研究課題名 (英文) A study of the role of integrated institute of welfare and education and teaching curriculum
 研究代表者
 山崎 晃 (YAMAZAKI AKIRA)
 明治学院大学・心理学部・教授
 研究者番号： 40106761

研究成果の概要 (和文)：

本研究の目的は、認定こども園の、長時間保育児と短時間保育児に対応したカリキュラム、子どもの発達、保育者の不安や期待、さらに、保護者の理想とする幼児・保育施設の姿を、総合的調査することである。その結果、カリキュラムはほとんどの認定こども園にあるが、管理者と保育者ではどのようなカリキュラムにするかについて認識が異なっていた。また、認定こども園に移行する前後で幼児に対する保育姿勢が変化することが明らかになり、認定こども園の発展にはエデュケアの思想を取り入れる必要性が論議された。さらに、勤務先によって理想の児童福祉施設についての理想像が異なっていることが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：

The purposes of this study were to do the total survey of the centers for early childhood education (Nintei-Kodomo-en) and care on curricula for long-time nursing children and short-time nursing children, their development, the fears and expectations of nursery teachers, and the ideal nursing institutions imaged by care-takers.

As results, almost of all the centers for early childhood education and care had their nursing curricula, but there existed differences in recognition between administrators and nursery teachers in drawing up curricula.

Also, the nursing attitudes toward children changed before and after switching over to the centers for early childhood education and care, which led to discussing the necessity of introducing the thoughts (または ideas) of educare. Moreover, it was made clear that the ideal images of the child welfare facilities varied depending on the places of employment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	792,133	240,000	1,032,133
年度			
年度			
総計	3,392,133	1,020,000	4,412,133

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：社会福祉関係 総合化施設 認定こども園 保育カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

文部科学省所轄の幼稚園(学校教育施設・学校法人等)と厚生労働省所轄の保育所(児童福祉施設・社会福祉法人等)の二元制度化されているにもかかわらず、以前から、幼稚園と保育所の一体的保育実践の試みが全国各地で行われている。同時に近年の社会情勢の変化などを背景とする国策として、幼保一体化施設(認定こども園)の普及が図られてきた。しかし、認定こども園の持つ特性については明らかになっておらず、また、短時間保育時と長時間保育時が同時に同じ場所、同じ時間帯で集団活動・保育を行うにもかかわらず、保育内容や保育カリキュラムについては検討されないままであった。そのため、乳幼児の発達を保障するためには保育カリキュラムの編成や保育内容について、また、既存の幼稚園や保育所に併設されることが多いことなどから生じる保育者・保護者の不安などについては考慮されないまま、また、地方自治体の担当者も手探りの状態であった。

2. 研究の目的

総合施設モデル事業実施園と幼保一体化施設(認定こども園)の取り組みの状況を的確に把握し、その問題点について明らかにすることであった。

総合施設モデル事業(35園)参加園および認定こども園実施園におけるカリキュラムの実態について、1)管理者のデータから、カリキュラムの有無、作成の経緯と内容、今後のカリキュラム改善点、認定こども園のカリキュラムについて、2)管理者と保育者の認識には、どのような差異・共通性があるかを、3)認定こども園で働き始めた保育者の保育観が、それ以前と比べてどのように変化したかを検討し、4)保育の専門家である保育士と子育て中の保護者がどのような子ども施設を望んでいるのかを検討し、5)今後の認定こども園の望ましいカリキュラムを吟味するにあたり、国際的動向を踏まえてエデュケアの概念を参考に検討した。

3. 研究の方法

1)総合施設モデル事業(35園)参加園および認定こども園実施園279園に調査用紙を郵送し、返送のあった86園のデータを分析した。調査内容は、(1)カリキュラムの有無 (2)カリキュラム作成の経緯 (3)カリキュラム作成への指導 (4)カリキュラム作成で考慮した事〔設置目的、家庭環境、保育目標、ねらい、家庭連携、現在の子どもの姿、行事、幼稚園教育要領、保育所保育指針、地域環境、

他園のカリキュラム、小学校連携〕 (5)カリキュラム作成の意義〔指導計画のため、保育目標達成のため、園全体の統一のため、年間保育の一貫性のため、保育の見直し、保育の見直し〕 (6)保育時間によるカリキュラムの区別〔(「短時間児用のカリキュラム」と「長時間児用のカリキュラム」をそれぞれに設定)、(「共通カリキュラム」で基本保育時間を規定し時間外保育はカリキュラム外)、(保育時間による区別なし)〕 7)今後のカリキュラム改善時の配慮点、であった。

2)データ収集は1)と同じ。調査内容は、(1)カリキュラムに関する保育者の認識 (2)管理者と保育者の双方に、短時間保育児と長時間保育児のカリキュラムの理想的なあり方について(選択枝は1)と同じ) (3)認定こども園のカリキュラムを作成・改善する上で、短時間保育児と長時間保育児のどちらにより配慮を要するかについて尋ねた。

3)全国279か所の認定こども園に質問紙を送付した。質問内容は、「あなたは現在ご自分のクラスで実際にどのような保育や指導の仕方をしておられますか。また、認定こども園となる前にはどのような保育や指導をしておられましたか。ここには、保育や指導の仕方について異なった意見、A、Bがペアで示されています。あなたの保育や指導の仕方は、A、Bのどちらにより近いでしょうか。」であり、それに対する回答を求めた。保育者の場面での対応についての回答を、子ども中心-教師中心、成果重視-過程重視、まとも重視-個性尊重の次元で分類した。

4)全国の4地域の認定こども園、保育所、幼稚園の保育者と保護者を対象として、保育施設としてあなたが重要視するものについての順位づけを求めること(たとえば、園の教育方針・保育方針、先生の人柄、保育内容など)、自分の所属する園での、子どもの活動のイメージ、先生の活動のイメージ、保護者のそれぞれの園への関わりのイメージについて、回答を求めた。

5)「認定こども園研究会」の研究ミーティングにおける議論などを基にして、今後の認定こども園や幼児教育・保育に関わる施設のあり方を検討した。

4. 研究成果

1) (1)カリキュラムの有無 分析対象となった61園のうち56園がカリキュラムがあると

Table 1. カリキュラム作成の経緯 (%)

	①幼保 (n=23)	②幼 (n=25)	③保 (n=3)	④裁量 (n=5)
新規作成	6 (26)	6 (24)	2 (67)	1 (20)
一部変更	12 (52)	12 (48)	1 (33)	4 (80)
無変更	4 (18)	6 (24)	0 (0)	0 (0)
認定後変更	1 (4)	1 (4)	0 (0)	0 (0)

Table 2. 保育時間によるカリキュラムの区別 (%)

	①幼保 (n=23)	②幼 (n=25)	③保 (n=3)	④裁量 (n=5)
個別	4 (18)	5 (20)	0 (0)	0 (0)
一部共通	12 (52)	13 (52)	1 (33)	4 (80)
全共通	7 (30)	7 (28)	2 (67)	1 (20)

回答した。(2)カリキュラム作成の経緯と内容カリキュラム作成の経緯:各度数と%をTable 1に示す。(3)カリキュラム作成への指導:受けた園は①8(35%),②10(40%),③3(100%),④1(20%)であった。(4)カリキュラム作成で考慮した事:最多選択項目は全タイプにおいて『保育目標』であった。(5)カリキュラム作成の意義:最多選択項目は保育所型以外において『目標達成のため』,保育所型において『園全体の統一のため』であった。これらの結果から,どの園タイプにおいても保育目標を軸にカリキュラムを作成していることが示唆された。その中でも保育所型が他タイプに比べて,積極的に指導を受けながらカリキュラムの新規作成を試みており,そこには園全体の統一を意図としている様子が垣間見られた。(6)保育時間によるカリキュラムの区別保育時間によるカリキュラムの区別について各度数と%をTable 2に示す。Table 2から,幼保連携型と幼稚園型は他タイプに比べて,保育時間によるカリキュラムを区別している様子が伺われた。(7)今後のカリキュラム改善時の配慮点について,多枝選択項目は,地方裁量型では『子どもの状況』に加えて『地域実態』や『家庭状況』,それ以外の設置タイプでは『発達段階』『子どもの状況』,であった。地方裁量型では他タイプに比べて,地域の実状を意識している傾向がみられた。

以上のことから,どのタイプの園も保育目標を中心にカリキュラムを作成しているものの,タイプによって以前の園状態から変化した部分,重視している内容が異なり,カリキュラムの内容や改善点に違いがあることがわかった。特に,幼稚園型は時間の延長に伴い,地方裁量型は地域への意識に伴い,それぞれ一部カリキュラムを加筆修正したり,今後の改善を考えているのに対し,保育所型

Table3 カリキュラムに関する保育者の認識 (%)

	①幼保 (n=138)	②幼 (n=143)	③保 (n=29)	④裁量 (n=19)
わからない	12(9)	3(2)	2(7)	1(5)
ない	5(4)	13(9)	9(31)	2(11)
関与なし	79(57)	68(48)	7(24)	7(37)
関与あり	35(25)	53(37)	10(34)	7(37)
無効回答	7(5)	6(4)	1(3)	2(11)

Table 4 管理者が理想とするカリキュラムのあり方 (%)

	①幼保 (n=30)	②幼 (n=29)	③保 (n=6)	④裁量 (n=5)
個別	5(17)	7(24)	1(17)	1(20)
一部共通	11(37)	14(48)	2(33)	3(60)
全共通	11(37)	6(21)	3(50)	1(20)
無効回答	3(10)	2(7)	0(0)	0(0)

は認定こども園として園全体に一貫性をもたせるためにカリキュラムを新規に組み立てている可能性が考えられた。

2) カリキュラム作成の経緯と実態

カリキュラム作成の経緯については,幼稚園教育要領解説(文部科学省,2008)にもあるように,本来,カリキュラムは全教職員の協力の下に編成されるべきものである。しかし,実際には3割程度の保育者しか作成に携わっておらず,カリキュラムの有無がわからない保育者もいることが明らかとなった(Table 3)。

(2)短時間保育児と長時間保育児のカリキュラムの理想的なあり方について管理者と保育者が理想とするカリキュラムのあり方はまちまちであり,園のタイプによる違いも明確でなかった。ただし,保育所型では,管理者・保育者ともに,半数以上が全共通カリキュラムを理想としていた(Table 4, Table 5)。

Table5 保育者が理想とするカリキュラムのあり方 (%)

	①幼保 (n=138)	②幼 (n=143)	③保 (n=29)	④裁量 (n=19)
個別	31(22)	47(33)	1(3)	1(5)
一部共通	51(37)	54(38)	10(34)	10(53)
全共通	48(35)	37(26)	17(59)	6(32)
無効回答	8(6)	5(3)	1(3)	2(11)

(3)認定こども園のカリキュラムを作成・改善する上で,短時間保育児と長時間保育児のどちらにより配慮を要するかについて,幼稚園型以外では,管理者・保育者ともに,半数以上が長時間保育児への配慮をより要すると回答した(Table 6, Table 7)。

このような結果から,保育者のカリキュラムに関する認識を徹底するとともに,作成への関与を促すことが喫緊の課題であるといえる。また,理想的なカリキュラムのあり方等について,管理者と保育者との間に認識の

Table6 管理者が配慮の必要性を感じる幼児 (%)

	①幼保 (n=30)	②幼 (n=29)	③保 (n=6)	④裁量 (n=5)
短時間保育児	5(17)	13(45)	1(17)	1(20)
長時間保育児	15(50)	10(34)	4(67)	4(80)
無効回答	10(33)	6(21)	1(17)	0(0)

Table7 保育者が配慮の必要性を感じる幼児 (%)

	①幼保 (n=138)	②幼 (n=143)	③保 (n=29)	④裁量 (n=19)
短時間保育児	40(29)	57(40)	6(21)	3(16)
長時間保育児	72(52)	63(44)	15(52)	13(68)
無効回答	26(19)	23(16)	8(28)	3(16)

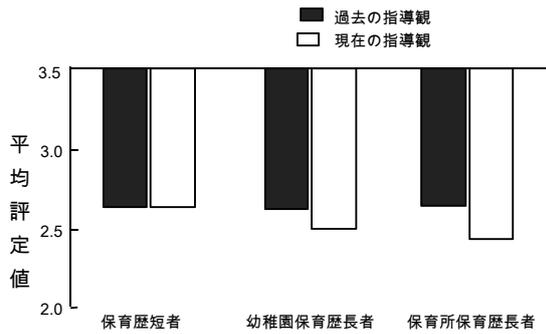


Figure 1 「子ども中心 - 教師中心」の平均評定値
(得点が高いほど「教師中心」の保育観であることを示す)
違いはなく、むしろ園のタイプによる違いが大きいことが示された。たとえば、保育所型は、長時間保育を基本としているためか、保育時間による区別のない全共通カリキュラムを志向する傾向にあったが、幼稚園型は、保育時間の多様化の中、幼稚園が従来対象としてきた短時間児への配慮も必要であると認識していた。

3) 認定こども園に移行する前と後で、保育観がどのように変化するかを検討した。幼稚園での保育歴も保育所での保育歴もいずれも5年以下の保育者(保育歴短者)が100名(平均経験年数4.0)、幼稚園での保育歴のみが5年よりも長い保育者(幼稚園保育歴長者)が99名(平均経験年数15.6)、保育所での保育歴のみが5年よりも長い保育者(保育所保育歴長者)が72名(平均経験年数13.1)を分析の対象とした。

(1) 保育経験にかかわらず、より「子ども中心」の保育観に変化した。(2) 保育歴の長い保育者はより「過程重視」の保育観へと変化し、特にそれは保育所保育歴の長い保育者において顕著であった。(3) 保育所保育歴の長い保育者は「まとも重視」の保育観から「個性尊重」の保育観へと変化することを明らかにした(Figure 1)。さらに、保育歴短者と比較して保育所保育歴長者の平均評定値が高く、「過程重視」であり、幼稚園保育歴長者も保育所保育歴長者も「過程重視」へと変化した(Figure 2)。

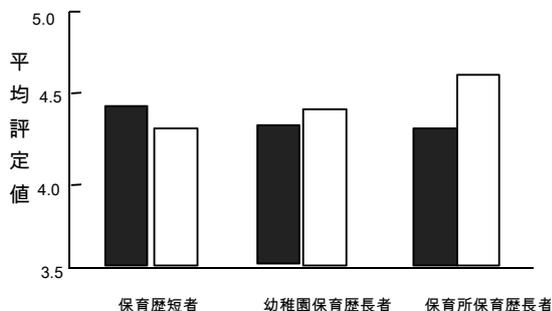


Figure 2 「成果重視 - 過程重視」の平均評定値
(得点が高いほど「過程重視」の保育観であることを示す)

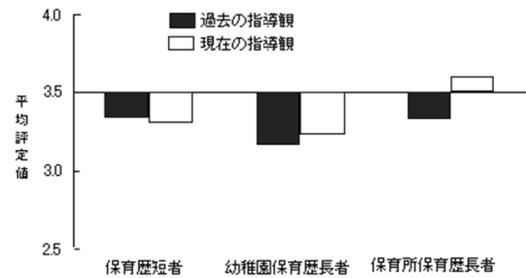


Figure 3 「まとも重視 - 個性尊重」の平均評定値
(得点が高いほど「個性尊重」の保育観であることを示す)

過去の保育観については幼稚園保育歴長者がもっとも「まとも重視」であり、現在の保育観については保育所保育歴長者がもっとも「個性尊重」の保育観であった(Figure 3)。

4) 保育の専門家である保育士と子育て中の保護者がどのような子ども施設を望んでいるのかを検討している。たとえば、保護者が園を選択する際に重視することとして、次のような結果が得られている(Figure 4)。重視する項目はどの園に勤務しているかによって異なるようである。

⑤: 認定こども園のカリキュラムの問題を中心にどのような方向を目指すべきかについて、エデュケアの考え方の導入の可能性について論じた。

2006年10月から、認定こども園制度が開始されている。わが国では、2008年度中に2000程度の園が認定こども園の認定を受けることを目指していたが、その見込みを大きく下回り、認定を受けた園は2008年4月1日の段階で229に留まっている(文部科学省・厚生労働省幼保連携推進室, 2008)。これには、認定こども園制度の先行きに対する懸念が払拭されないまま、いまだ認定こども園への移行に静観を構える園も多いことが推察される認定こども園の課題としては、大きく制度上の課題(村山, 2005; 豊田, 2006)、保

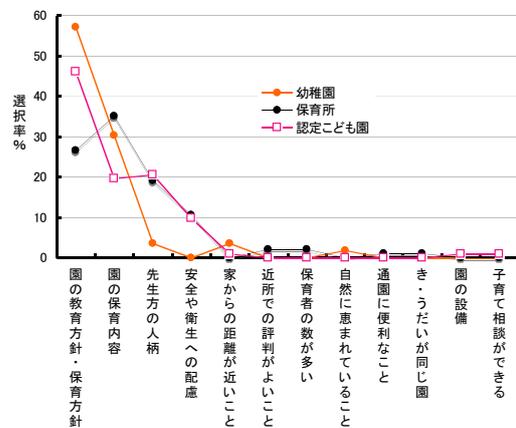


Figure 4 保育施設を選択する際に最も重視する項目 (%)

育の質に関する課題(諏訪ら, 2004;山崎ら, 2004;七木田ら, 2006;増田ら, 2007), カリキュラムに関する課題の3点に分けられる。本では論文では, 保育現場が抱える問題として, 喫緊の課題である認定こども園のカリキュラムに関する課題について論じた。

認定こども園の見通しは決して明るいとはいえない。現在までに認定された園のタイプを見ると, 幼保連携型と幼稚園型が多くなっている(文部科学省・厚生労働省幼保連携推進室, 2008)。この背景には, 過疎の地域でやむなく幼稚園・保育所を統合したケース, 幼稚園の経営悪化の打開策として認定こども園への移行を図ったケースが少なくないことが推察される。つまり, 財政的逼迫などの経営的理由が優先され, 保育の質は後回しになっているのである。認定こども園の目的の一つに, 保護者が有する多様な子育てニーズへの対応がある。当然, 保護者のニーズに応えることは, 園経営のうえで避けられないことであるが, 過度な対応は保育の質の低下を招きかねない。

エデュケアは, 保育者間の緊密な協議・連携に打開を見出している点でカリキュラムづくりの目指すべき方向性を示していると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①松井剛太, 山崎晃他, 認定こども園のカリキュラムに関する課題と展望 -エデュケア(educare)の概念からの検討-, 幼年教育研究年報, 査読有, 第31巻, 15-21.
- ②藤木大介・山崎晃他, 認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響, 投稿準備中 (2010年度再投稿)

[学会発表] (計5件)

- ①若林紀乃, 山崎晃他, 認定こども園の取り組みの現状とこれからの方向を探る (2) -カリキュラムに関する管理者と保育者の認識について-, 日本保育学会第62回大会発表論文集, 38
- ②越中康治, 山崎晃他, 認定こども園の取り組みの現状とこれからの方向を探る (1) -カリキュラム作成の実態について-, 日本保育学会第62回大会発表論文集, 39
- ③若林紀乃, 山崎晃他, 認定こども園の取り組みの現状とこれからの方向を探る (3) : 管理者の理想のカリキュラムと関連研修の実態, 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 667
- ④越中康治, 山崎晃他, 認定こども園の取

り組みの現状とこれからの方向を探る (4) : 保育者が理想とするカリキュラムのあり方と関連要因, 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 668

- ⑤藤木大介, 山崎晃他, 認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響の検討, 日本保育学会第63回大会発表論文集,

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 晃 (YAMAZAKI AKIRA)
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号 : 40106761

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :